

研究報告：アートミーツケア学会総会京都大会

『集団のアホダンス：Re-imagining Others』

京都市立芸術大学美術学部構想設計

“The Birth of Comedy: Re-imagining Others”

Kyoto City University of Arts Faculty of Arts Concept and Media Planning

Satoru Takahashi 高橋 悟



図-1

1) 京都大会の主旨

京都大会では、アートとケアについて、身体や個の表現からでなく、集団やコミュニケーションの視点から接近する事に重点を置いた。その為に、「アホダンス」という旅芸人の一座のような造語をテーマに使用することにした。そこには、ヒトが他者や環境を「妙なフルマイ」で誘惑すること、立ち止まり、列を離れ、市場原理や効率化に包摂されることのない無根拠なフルマイの連鎖の生むという意味が込められている。それはまた、当事者と

して所属する現場から抜け出て、各人があらゆる異なった立場の視点から考えることを促す思考実験でもある。ひとりよがりのアートが、自律や健常への方向づけではなく、共に居ることを仕事とする「ケア」と出会うことで、「アートは誰のものか？」という不可避の問いを経て「生きたアート」の探求へと発展することを期待しての事である。さらにまた、アートという不可解な謎が、ケアの仕事にたずさわる方々に、「もう一つ」の迂回方法を問いかけることになればと思う。

2) 概要と日程

12月15日:

場所: 京都芸術センター 4 階の明倫茶室

「不意の味」茶会 席主 鷺田清一 ほか

茶室のしつらえ: たんぱぼの家のアーティスト作品

監修: 森野彰人 (京都芸大)

内容: 「不意の味」とは、既存の意味では捉えきれない微妙なニュアンスや、偶然の出会いへと心身を開く姿勢をさす。茶室という場を集団のコミュニケーションという視点から捉える「不意の味」茶会では、コトバだけでなく、モノや環境への作法にも着目し、障害を有する方々との協働による実験的な茶室のしつらえとした。



図-2

12月16日

・「基調体操: Tracing Bodies」

場所 大学会館ホール+交流室

講師: 砂連尾理 (コンテンポラリーダンス)

西川勝 (臨床哲学) ほか

内容: 本大会のメインテーマでもある、集団、コミュニケーション、アホーダンスをキーワードに、集団で体と頭と心を動かすための「基調体操」を行った。



図-3



図-4

・シンポジウム: 「集団のアホーダンス: Re-imagining Others」

場所: 大学会館交流室

内容: 「個の表現」としての「作品」という視点からではなく、ヒトとヒトの創造的な相互行為を生み出す場について、現代アートに於ける試みを例に考察した。

プレゼンテーション① 「見届けることの大切さ」

保坂健二郎 (東京国立近代美術館学芸員)

プレゼンテーション② 「態度とデモンストレーション」

藤浩志 (秋田公立美術大学教授: 美術家)

プレゼンテーション③ 「状況のアナーキテクチャー？」

高橋悟 (京都市立芸術大学教授: 美術家)

保坂氏のプレゼンテーションでは、まず「キュレーション」というコトバの語源には「見る=ケア」という意味が込められている事が指摘された。それは、美術館に作品を陳列する展示作業とは異なり、創造が辿る複雑なプロセスや複数の他者との関わり等も含めた「生の文脈」に時間を掛けて付き添う姿勢を示す。保坂氏からは、障害者が制作するプロセスに寄り添うことで上記のような立ち位置へとシフトするようになった事が示された。藤氏はアートとは個人が他者に何かを「伝える」ものではなく、個人の感覚的なこだわりを通じて他者とつながろうとする態度であり、そこから立ち上がる多様な集団に新しい地域社会のありかたを示す具体的な仕組みを提示した。高橋は、健常者によるアートワールドから「排除」されたアウトサイダー発見物語でもなく、従来の美術の歴史の枠組みに「包摂」されるのでもない別の方法で、アー

トとケアが出会える「自由な場」の可能性についてのプレゼンテーションを行った。各プレゼンテーションの後の意見交換で明らかにされたのは、参加型と呼ばれるような予定調和的なアートと想像でしかない他者との出会いではなく、「他者の想像を可能にする鏡」としての制度や枠組みに亀裂を入れる作業の重要性であった。



図-5

☆レクチャーパフォーマンス部門-1

・賛歌レクチャーパフォーマンス「会衆讃歌はセラピー？」

場所：大学講堂

講師：山本毅（京都芸大音楽学部教授）

出演：レクチャーとソングリード 山本毅、歌 落合庸平、ピアノ 北あおい、ヴィオラ 山本由美子、チェロ 山本善哉、ギター 山本依生ほか

・焚き火カフェ：小山田徹（京都芸大教授・彫刻）

ヒトとヒト、ヒトと自然を結びつけるツールとしての「焚き火」を囲んだおらかな繋がり場の場を設けた。

12月17日

・茶会「土星の環」永守伸年（京都芸大講師・哲学）

きれいな環をつないでいるようで、近づき目をこらして



図-6

みると、石、岩、氷のばらばらな破片が見えてくる。そんな土星の環のように、つながらなくてもええやんかの精神で、なんでもあり、無重力のコミュニケーションを楽しむ茶会。

☆レクチャーパフォーマンス部門-2

・Tracing Voices ラップ x ケア x アート：

場所：大学会館ホール 15時45分～17時00分

講師：Shing02（ヒップホップMC）、高橋悟（京都市立芸術大学美術学部教授）ほか

出演：Shing02、安田真隆、水田篤記、ガブリエル・バロンタン、池辺義隆ほか

内容：プレ事業として開催した「生きたコトバ」をテーマにしたワークショップを踏まえたもので、異なる感性、思考、リズムを持つ人達による「新しいコミュニケーション」の実験的な記録映画の作成と、その成果発表をライブ形式で行った。主役は、安田真隆、水田篤記という18才と20才の若者である。安田くんは強度のアスペルガーで普段は他者とのコミュニケーションを取る事はなく自己の世界の中で、イラストレーションや物語を創造している。またインターネットの動画をダウンロードして、彼が気に入ったほんの数秒のシーンを繰り返し、繰り返し、



図-7



図-8



図 - 9



図 - 11



図 - 10



図 - 12

とてつもない速度でタブレット端末を操作し続ける。安田くんの頭の中には、無数の動画のストックがあり、それを即座に取り出しながら Re-Mix している姿は、音楽の DJ に例えるなら、VJ と呼んでもよい。一方の水田くんは、小児麻痺で手足と発語に障害がある。柔和で明晰な好青年であるが、彼の心の中の速度と、現実アウトプットできる速度には大きなギャップがある。「昇天」「憂鬱」「人は進むがすぐ老いる動物である」など、優しい水田くんの表情からは思いもよらない激しく暗いコトバを描いた絵画を制作している。その制作手法も独特で、まずマーカーで文字を描き、それに蠟を塗り、墨で塗りつぶしてから、改めて文字をナイフで掘り起こすという作業である。ワークショップでは、安田くん、水田くんと時間を共に過ごし彼らとのコミュニケーションを図った。ここでのコミュニケーションとは、ミスコミュニケーション、ディスコミュニケーション、対立、放置をも含んだ集団行為である。着地点を設けず、試行錯誤を続けながらも、参加メンバーの間には、安田くん、水田くんが主役になれる場さえできれば、失敗も成功もなく、それで良いと

いう意識が芽生えた。17日の発表の当日は、安田くんは天井の高いホールの空間が怖くなり、水田くんは観客の数に圧倒されて泣き出しそう。このような場に彼らを無理に引きずり出した責任を痛感しながらの開演となった。予想もしない結果に驚嘆したのは、かつて他者とのコミュニケーションを全くとらなかった安田くんが、観客に指揮を与えながらパフォーマンスを行い、いまにも逃げ出したそうな水田くんが、予定した時間をはるかに超えた即興演奏を披露した事だ。いま振り返ってみると、障害というコトバにとらわれ、そのボーダーの手前で他者を規定していたのは我々のほうであり、安田くんも、水田くんも、そのようなボーダーを軽々と超えていたのである。

今回の「集団のアホーダンス」での試みは、「障害アート」を同一のものさしで測ることで多様な生の在り方を既存のタイプに包摂してしまう圧力や、作品行為を個人に還元してしまうことで他者や環境とつながる当事者達の「生の文脈」を排除することへの抵抗としての批評行為であったように今は思う。